

1. はじめに

近年、少子高齢化が問題となっている。いわき市でも、高齢者の人口が全体のおよそ26%にも及んでいる。このような現状にあるなかで、平中心市街地をはじめ、いわき市内の市街地に目をむけてみると、高齢者が安全に過ごすことができないのではないかとと思われるような障がいが多くみることができる。それらの障がいを排除し、誰もが快適で安全に過ごすことのできるユニバーサルデザインのまちをつくることが、今後の社会ではより重要であると考ええる。また、歩行者空間だけでなく、自動車・自転車と歩行者がうまく共存することのできるような空間づくりも、駅前のように自動車・自転車・歩行者のさまざまな交通主体が多く利用しているところにおいては必要であると考ええる。

本研究は、平中心市街地における自転車歩行者道の利用実態を明らかにすることを目的とするものである。具体的には、自転車歩行者道の形態を明らかにし、主体別にみる利用実態を明らかにしていく。その上で、誰もが快適で安全に利用することのできる空間であるための必要事項を追究していく。

2. 研究方法と対象

- (1) 平中心市街地における自転車歩行者道の整備状況
- いわき市平中心市街地における自転車歩行者道の分布をみると、いわき駅から延びる駅前大通りなどの幹線道路をはじめ、国道6号などの主要な道路にみることができる。その一方で、ショッピングセンター前や土地地区画整理事業により近年開発・整備された、いわき駅へとむかう市道にもみることができる。さらに、本町通りなどの商店街を通るコミュニティ道路も該当している。しかしながら、いわき駅前から南北に延びる駅前大通りを除いては、部分的な整備となっており、その連続性の確保が課題であるといえることができる。
- (2) 研究の方法

本研究の方法として、第一に、平中心市街地内の自転車歩行者道の整備状況と分布を調査した上で、その形態を明らかにするために、実態調査を行った。第二に、対象地域内に分布する15の自転車歩行者道について、その利用実態を明らかにするために、自転車の走行経路に着目した調査を行った。その上で、自転車走行の実態とその経路に影響を与えている要因について分析していく。

3. 自転車歩行者道の形態について

- (1) 構成要素
- 対象とする自転車歩行者道について、現地調査を通

してその形態について分析した結果、自転車歩行者道の構成要素としては、縁石、側溝、点字ブロックを共通の要素としてあげることができ、点字ブロックにより自転車歩行者道が分けられる形となっている。それに加えて、バス停やベンチ、自動販売機などの沿道土地利用の違いにより要素が加わる形となっている。

(2) 自転車歩行者道の分類

対象とする自転車歩行者道について、共通の構成要素の一つである点字ブロックを中心として、車道側と歩道側の幅員に着目してみると、対象とする15の自転車歩行者道はいずれも車道側の幅が広く、その割合より1:1、2:1、3:1、4:1の4パターンに分類することができる。それぞれの分類に該当する自転車歩行者道を模式図に表わしたものが、図1である。対象地域において最も多かった分類は、2:1のパターンで7箇所、次いで1:1と4:1のパターンで3箇所、3:1のパターンは2箇所であった。沿道土地利用に着目すると、4:1のパターンに該当する2つの自転車歩行者道は、ともにショッピングセンターに接続する道路であるという特徴をみることができる。

4. 自転車歩行者道の利用実態について

自転車歩行者道の利用実態について、4つの分類を基に対象地域内より典型道路を1つずつ抽出し、自転車走行に着目した利用実態について調査した。ここでは、訓練を積んだ調査員が、目視により性別(男・女)と年代(若年・中年・老年)に着目した属性を分類し、走行経路について同じく目視により調査した。

(1) 自転車歩行者道の利用実態(1:1のパターン)

点字ブロックを中心として、車道側と歩道側の幅員が1:1のパターンに該当する自転車歩行者道の利用実態について、年代別にみたものが、図2である。

これをみると、年代に着目すると、若年と中年においては、中央の点字ブロックに寄る傾向をみることができ、点字ブロックに沿って走行している人が多いの

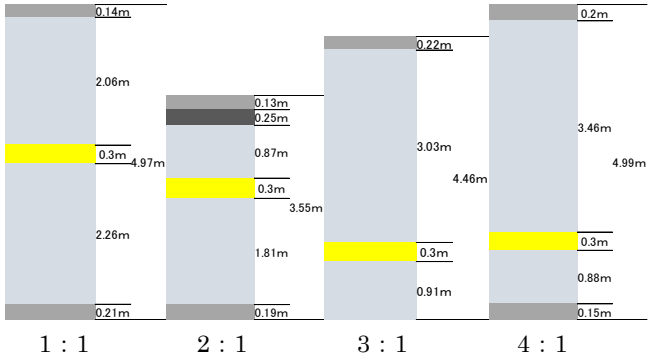


図1 自転車歩行者道の形態分類

キーワード：自転車歩行者道、自転車、誘導ブロック

連絡先：福島工業高等専門学校建設環境工学科 〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾30 TEL:0246-46-0830

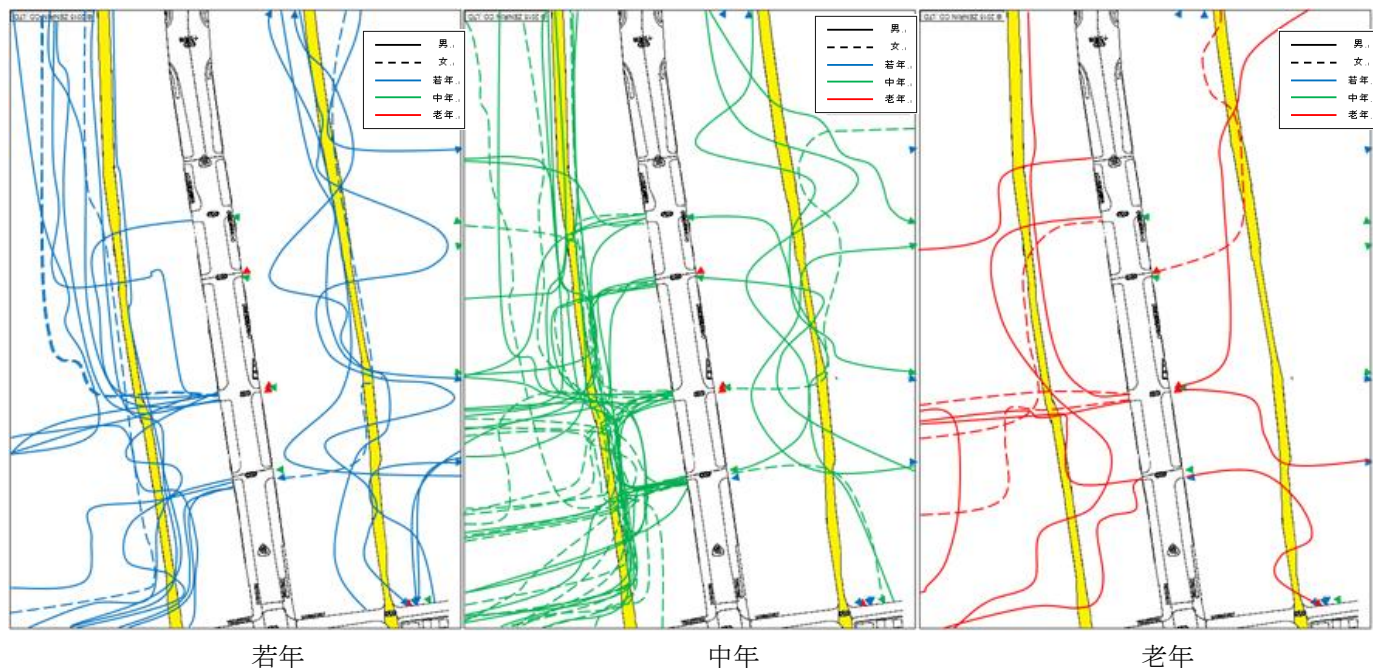


図2 自転車歩行者道の利用実態 (1:1のパターン)

をみることができる。一方、老年においては点字ブロックの内側を走行する人が多いのを見ることができる。走行経路としてみると、一貫して同じ経路を走行している人を多くみることができる。

性別に着目してみると、男女間で大きな違いをみることはできないものの、女性においては、どの年代においても点字ブロックより内側を走行している人が多い傾向をみることができる。

## (2) 自転車歩行者道の利用実態 (2:1のパターン)

点字ブロックを中心として、車道側と歩道側の幅員が2:1のパターンに該当する自転車歩行者道の利用実態について、性別ごとにみたものが、図3である。

これをみると、全体として広い車道側を走行する人を多くみることができる。しかしながら、バス停やベンチがある箇所では、それを避けるように走行する形となっている。そのようななかで、1:1のパターンと同様にやはり点字ブロックに沿って走行する傾向にある人も多いのを見ることができる。これらのことについて、属性に着目すると、高齢者において、途中で右往左往する形を複数みることができ、そのなかでも女性において顕著であるということが出来る。この自転車歩行者道の沿道には大型店が立地しており、その入口付近では、左右にぶれるケースを多くみることができ、バス停とともに走行に影響を与えているということが出来る。

## 5. おわりに

自転車歩行者道を対象とした本研究の成果として、次のことをあげることができる。

第一に、構成要素と幅員により4つのパターンに分類し、その形態を明らかにすることができた。

その上で、第二に、自転車走行に着目した調査・分析により、その利用実態を明らかにすることができた。今後は、さらなる形態と利用実態との関係について調査・分析を進め、歩車混合交通における課題と、その課題を改善するための対策を追究していく必要がある。

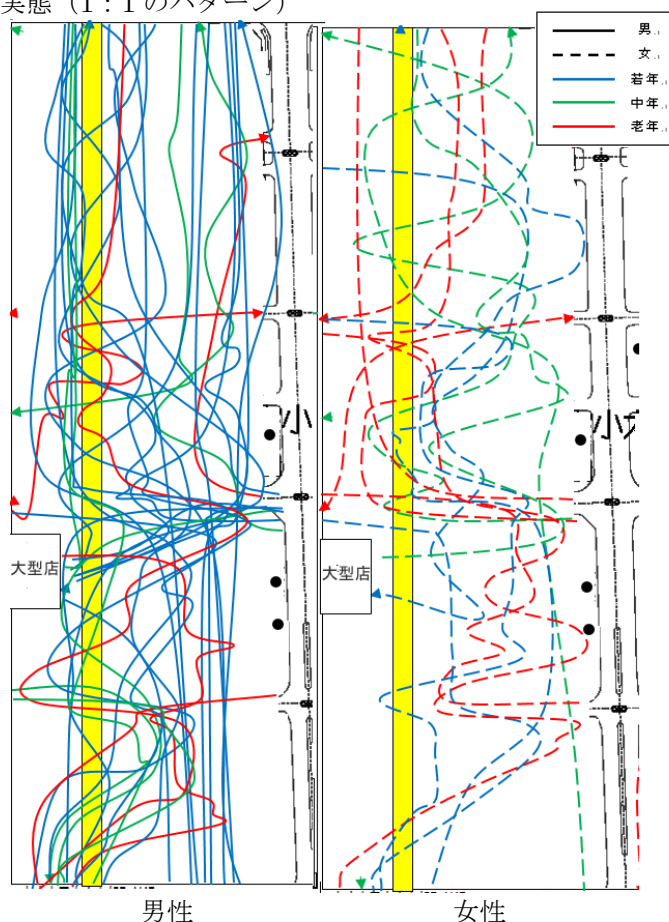


図3 自転車歩行者道の利用実態 (2:1のパターン)

参考文献

- 1) ベン・ハミルトン, シェアード・スペースと街路デザイン, 都市計画 285, pp.48-51, 日本都市計画学会, 2010 年
- 2) 山本佳和・齊藤充弘, 街路空間の形態と評価について, 土木学会第 61 回年次学術講演会概要集部門IV, pp.419~420, 2006 年
- 3) 仙田満・上岡直見, 子どもが道草できるまちづくり 通学路の交通問題を考える, 学芸出版社, 2009 年
- 4) 鈴木敏, 道のバリアフリー 安心して歩くために, 技報堂出版, 2002 年
- 5) 鈴木敏, 続 道のバリアフリー コミュニティ・ゾーンをつくる, 技報堂出版, 2004 年